

創刊の辞

名古屋言語研究会は、2003年4月に、それまで別々に活動していた「名古屋・ことばのつどい」と「東海言語研究会」が一堂に会して発足しました。名古屋・ことばのつどいは、田島毓堂、丹羽一彌両教授の主催のもと名古屋大学文学研究科日本語学研究室と言語学研究室出身者の有志が中心となって運営し、東海言語研究会は言語学研究室が中心的に運営していたものであります。これが合流するようになったきっかけは、言語を専門分野にする者同士が意思疎通を欠くことは良くないという至極まっとうな動機からでした。この年度には名古屋大学21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」が発足し、二つの研究室はともにこのプログラムに参画していましたので、これが合同「名古屋言語研究会」発足の原動力となったことは間違いないところです。以来、今日に至るまで、一度の空白もなく月一回（8月を除く）の研究会を継続することが出来たのは、会員の皆様の努力のたまものと感謝しています。2007年3月の例会を以て定例研究会は、44回に達し、順調に活動を継続しています。

名古屋言語研究会は、全国学会と違い、地域の研究会に相応しく、長時間にわたる濃厚な質疑応答を特徴としており、特に若い研究者にとって格好の修練の場となっています。ここで鍛えられ、後に全国学会で発表し、学会誌に掲載された研究がいくつもあることから見ても、この会の水準の高さに安堵しています。

私たちの研究会は、とりあえず口頭発表会の開催のみを目的としていましたが、年会費を徴収しており、会場費にかかる負担が比較的軽いことから、未還元会費の蓄積は問題であるという認識も出始めました。また、機関誌を刊行したいという要望も院生諸君を中心に出されるようになりました。これは研究活動が順調に進んだ結果の自然の成り行きと言えます。そこで諸問題を解決するために日本語学、言語学双方の研究室の院生と宮地朝子さんが助言するワーキンググループをお願いして、機関誌発行と会費の改善に関する勧告を提出して頂いたのは、ご案内の通りであります。

お手元の『Nagoya Linguistics』（名古屋言語研究）は、以上の経過に基づく私たちの努力の最初の結晶と言うべきもので、これの刊行の実現に至ったことは誠に慶賀に堪えません。私たちの研究会は、これを機会にさらなる学問水準の向上を目指すべく、努力を積み重ねて行く所存であります。会員の皆様におかれてましては、日頃の優れた成果を『Nagoya Linguistics』（名古屋言語研究）に結集して頂きますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

2007年3月 名古屋言語研究会